

特集 とうがらし・わさび

Ⅱ わさび【産地の取組】

岩手県における林間畑わさびへの取り組み

岩手県宮古農業改良普及センター岩泉普及サブセンター

主査農業普及員 小原 善一

1. 岩手県におけるわさび生産

岩手県でのわさび栽培の歴史は古く、大正4年頃から現在の遠野市宮守町達曽部地区で始まったようです。とくに北上山系沿いでは豊富な湧水資源があるため、昭和50年代から各地で積極的に事業導入を図りわさび田造成が行われました。しかし、多くの地域では川の増水時にわさび田が流されるなど、栽培を継続できず、現在でも安定的に生産しているのは遠野市宮守町達曽部地区のみとなっています。その中で、岩泉町においては山林にそのまま植えつける「畑わさび」の栽培が定着しています。岩手県は「畑わさび」としての生産量では全国の50%を占めています。平成24年特用林産基礎資料によると、岩手県の「水わさび」の生産量は24t（葉柄+根茎）に対し、「畑わさび」の生産量は685t（葉柄+根茎）となっています。そしてそのほとんどが岩泉町で生産されています。

2. 岩泉町の特徴と畑わさび振興について

岩泉町は岩手県の北東部に位置します。北上山地の中ほどにあり、東方は北部陸中海岸の太平洋に臨んでいます。急峻な山林に囲まれ、農耕地は少なく、昔から木炭生産など森林資源の活用が主な産業であり、農業では畜産が主流です。やませ気象の影響を受ける冷涼な地域ですが、夏は30℃を超える日が続く場合もあります。冬は寒冷ですが、積雪量は多くありません。

岩泉町でもはじめは「水わさび」の栽培に取り組んでいましたが、やはり川の増水時に流されるなど、定着しませんでした。しかし、生産者が試験的に林間で栽培したところ生育が良好で、生産性が期待できることから、昭和59年頃から加工原料用として「畑わさび」の栽培が開始されました。

行政側も、豊富な森林資源を利用できる特産物

として、わさびの生産振興を積極的に行ってきました。岩泉町では、昭和60年から平成4年まで実生苗の購入に対し助成を行い、平成5年からは基盤整備等の助成に組み替え推進しました。さらに平成8年からは県単事業を導入して新規ほ場造成や生産機械、生産施設整備を推進しています。

作付面積拡大に伴い、苗の大量確保が必要になったことから、平成3年に国庫事業を活用し「わさび育苗施設」を整備しました。同時に、農業改良普及センターではセル成型育苗法の技術確立に取り組み、育苗の省力化と共に苗大量供給体制を確立することができました。

このような取り組みから畑わさびの生産は急激に増加し、平成16年には栽培者数103名、出荷量661tまで拡大しました。

産地の拡大とともに生産組織の育成も行われ、現在では「JA 新しいわて宮古地域わさび生産部会」、「岩泉町わさび出荷組合」、「豊岡わさび生産組合」の3組織があり、その3組織の連絡調整役として「岩泉町わさび生産者連絡協議会」が置かれ、JA、岩泉町、普及センター等の関係機関と一体となって産地強化のための対策を実施するとともに新技術の開発・普及に努めています。



図1 収穫間近の畑わさび

3. 栽培方法の概要

作付地は、比較的傾斜の緩い、作業しやすい山林で、出来るだけ作土の深いところを選びます。わさびに適した光量となるよう間伐(樹木の間引き)を行い、雑草や細い木を刈り払い、間伐した木や落ちている枝をほ場から搬出し、わさびを植えることが出来る状態とします。苗は、春又は秋の冷涼な時期に植えつけます。基本的に山林の中であるため、耕起はしません。堆肥、石灰、基肥を土壌表面に施用し、株間30～40cm×条間60～70cm、10aあたりおよそ4,000本を目安に植えつけます。雑草に負けないよう生育途中に手取り除草を行い、追肥は冷涼になる秋の始めと、雪解けすぐ、花芽除去後の3つの時期に行います。春、花芽はすべて除去し、株の生育を促進させます。収穫は、岩泉町では6月下旬から10月ころまでに行うので、春植えなら翌年、秋植えなら2年後に収穫を行います。収穫は根本からスコップ等で掘りとり、折れが起きないように作業場に運び、葉を切り落とし、株を茎いもごとにわけ、茎いもからひげ根をむしりとり、洗浄して泥や異物を落とします。出荷部位は基本的に葉柄部といも部であり、出荷



図2 畑わさびの調整作業



図3 収穫・調整された畑わさび

先に応じてコンテナや段ボールで出荷します。

4. 生産物の販売先

畑わさびは加工原料として、わさび加工業者に販売されます。岩手県内の食品加工会社や一次加工会社に販売されるものもありますが、生産量のもっとも多いJA新いわて宮古地域わさび生産部会では、主に長野県のわさび加工業者に販売されます。このわさび業者では岩泉町の第3セクターである(株)岩泉産業開発に一次加工を委託しているため、生産物は(株)岩泉産業開発に集荷され、そこで検品、洗浄、熱湯処理した後、細断し、急速冷凍します。長野県には凍結されたまま送られ、加工されます。岩泉町では、一次加工の処理能力を向上させるとともに最終製品の加工も視野に入れ、平成25年度に国の助成を受けて新たな一次加工施設を建設しました。これまで岩泉町ではわさびの製品化がなかったことから、今後加工等にも取り組むことが期待されます。

5. 安定生産についての取り組み

畑わさびは連作による減収が甚だしく、3作連作した後は大きく収量が減少していました。そこで、堆厩肥等の利用による土づくりに取り組んだ結果、近年では連作による減収は軽減されています。栽培方法も少しずつ改善され、平成10年頃には単収1,000kg/10aでしたが、近年では1,800kg/10a程度を維持できるようになっています。

また、栽培を始めた当初は病害虫の発生はほぼ皆無でしたが、長い年月栽培を続けている間に病害虫の発生も増えてきています。特に近年ではナトビハムシの発生が深刻です。ナトビハムシは過去には全く見られなかった害虫ですが、近年は山林の中で定着し、どのほ場でも被害が見られるようになっています。成虫は夏から秋にかけて葉や葉柄を食害し、幼虫は春に葉柄の内部を食害します。葉柄を食害されると、食害部が黒色に変色するため、商品価値が無くなってしまいます。普及センターではこれらの対策のため岩手県農業研究センターと連携し平成19年にエトフェンプロックス粒剤、平成26年にジノテフラン水溶剤の登録拡大に取り組み、防除体系の構築を図っています。

また、近年では、夏期高温による収量低下も問題になります。平成22年から平成24年は高温年となり収量が減少しました。さらに、長期間の降雨不足など、わさびの生育に適さない気象が多くなっています。これらについては現在のところ特別な打開策がなく、間伐を強くしすぎて直射日光が当たり過ぎないように、耕種的な管理改善で対応しているところです。

6. 畑わさびのモデル経営

畑わさびを開始した当初は林業や畜産との複合経営として導入され、家族労働力のみで栽培されていたため、1戸あたりの栽培面積は零細でした。産地化が図られるとともにわさびの専門化が進み、大規模経営を行う生産者も現れました。ここで、平成23年度大日本農会農事功績者として、野菜部門で緑白綬有功章を受章された馬川竹夫氏の経営を紹介します。

馬川氏は岩泉町の畑わさび栽培の先駆者です。わさびを始めるまでは、岩泉特産の短角牛の生産や原木シイタケ生産など様々取り組んでいましたが、わさびを林間に植えたところ手応えを感じ、



図4 葉を食害するナトビハムシ



図5 馬川氏の畑わさびほ場

昭和59年より畑わさび栽培を開始しました。着実に栽培面積を増やし、現在では7 haの山林を使ってわさびを栽培しています。馬川氏の栽培している山林は、県有模範林を借地しているもので、比較的斜度が少なく、栽培しやすいほ場です。自由に間伐できないなどの制約はあるものの、県の担当者との連絡を密に行い、問題なく栽培できています。条件の良い山林をまとめて確保できたことで、規模拡大を他の生産者より早く着手することができました。

大面積でも安定した収量を維持するため、間伐や枝打ちなどの調整により最適な遮光技術の実施、良質堆肥の施用や土壌診断結果に基づいた施肥などの土づくりの実施、害虫等の防除対策の徹底などを心がけています。

また、馬川氏は自家採種・自家育苗を行っており、コストの削減とともに優良系統の選抜を行いながら採種を行い、品質の良いわさび生産を継続しています。

栽培規模が大きいため、植付けや収穫には近隣からパートを雇い入れています。年間延べ1500人位を雇用し、効率よく働けるよう分業制とするなど、作業能率をあげる工夫にも取り組んでいます。

このような畑わさび経営の結果として、品評会では例年高い評価を得るわさびを出品しており、特に平成17年には林野庁長官賞を受賞しています。また、平成11年には、「大規模な畑わさび経営を確立し、畑わさびと林業を結びつけた岩泉農業のモデル経営」として岩手農業賞を受賞しています。そして平成23年に大日本農会農事功労者に選ばれました。

畑わさび以外に、馬川氏は「たらのめ」の促成栽培を行っています。岩泉町は冬は雪で閉ざされ畑わさびの作業は全くできません。そこで、1月から3月までの労働力をうまく活用するため、「たらのめ」を導入しました。畑わさびの作業が終了する11月から穂木を採取し、ハウス内で加温することで冬期間出荷できます。穂木の育成時期に畑わさびの管理と重なるところもありますが、基本的に畑わさびとは労力分散できているようです。現在「たらのめ」の作業は家族だけで行っていますが、将来的には周年雇用して安定した労力確保



図6 わさびの洗浄作業をする馬川氏



図7 新規栽培者を募る見学会の様子

できるよう、冬期の品目拡大を検討しています。

7. 新たな担い手の参入

馬川氏が畑わさびの大規模経営を確立した事が、岩泉町の農業で収益を確保するモデルとなり、その経営を目指す若い生産者が現れるようになりました。

現在の岩泉町内の生産者は、ほとんどが昭和60年から平成7年までの10年間で栽培を開始した人達で、多くが70歳を超えています。馬川氏は栽培者の中では若い方であり、その下の世代はいませんでした。

しかし、近年では若い生産者もわさびを始めるようになっています。平成19年に、30代の青年が馬川氏のもとで研修を受け、新規就農としてわさび栽培を開始しました。それを皮切りに平成22年には岩泉町外から、さらに平成25、26年と町内から1名ずつ若い生産者が新規就農し、畑わさびを開始しています。更に平成27年就農に向け現在研修中の若者もいます。いずれも家族が畑わさびを経験しているわけではなく、本人達も他産業に従事した後の就農でした。このように、岩泉町の若い世代では、畑わさび生産が将来期待できる産業と認識され始めていると思われます。

若い生産者たちは畑わさびを副業としてではなく、はじめから所得確保の中心品目と捉えているため、規模拡大にも積極的です。平成26年のJA新しいわて宮古地域わさび生産部会では、4名の30代以下の生産者が全体の生産量の1割を担っており、ここ数年は若い生産者がさらに規模拡大していく予定なので、さらにその割合が増加していく

見込みです。今後も若い生産者の参入を促進していくことで、高齢化による産地減退に歯止めをかけることができそうです。

8. 今後の課題

若い生産者の参入が見られるとはいえ、現時点では高齢により栽培をリタイヤする人のほうが多く、年々生産量は減少傾向です。新たな担い手の確保・育成は急務です。また、地域全体が高齢化で働き手が減少していることから雇用労力も確保しにくくなっています。産地として今後どのように「人」を確保していくかは大きな課題です。

さらに、今後わさび生産者の規模拡大を図っていくためには省力化・機械化を図ることが求められています。現在わさびの作業のほとんどは人力であり、労力が栽培面積拡大の制限要因となっています。山林での栽培のため難しい課題ですが、今後の産地維持に向けて取り組んでいく必要があります。

わさびの栽培に適したほ場の確保も重要な課題です。岩泉町は山林が豊富とはいえ、傾斜が緩やかで作業道を作れる場所は多くありません。関係機関等が連携し、情報共有を進めていく必要があります。

病害虫についても課題が残っています。連作することで病害虫の発生が増えており、特に現在防除に苦慮しているナトビハムシ、一部ほ場で発生している根こぶ病などの対策を構築する必要があります。さらに、岩泉町においてもシカが増加しわさびを食害するようになっているため、対策が必要です。